

純文芸雑誌『文学界』誕生の周辺

——文化公論社田中直樹の文化観——

中根 隆行

はじめに

一九三三（昭八）年秋に続出した『文学界』『行動』『文芸』といった新規参入をはたした文芸雑誌群は、各誌それぞれの立場から「文学復興」もしくは「文芸復興」というスローガンを掲げて登場している。後に、国文学史的叙述では、この年を「文芸復興」始発期と位置づけるのが概ねの傾向といえるであろう。この用語に関する是非は措くとしても、同年秋以降の文芸ジャーナリズムでは、「文芸復興」について何かを語ること自体が、商品化された差異として流通していたのは事実である。それに対して、たとえば小林秀雄は、「文芸復興」現象を「幽霊」と称して、以下のように述べている。

僕は幽霊の正体をみよ、と言ふのではない。要らざる幽霊をでつち上げるな、と言ふのだ。同情するにせよ、軽蔑するにせよ、何故に二三の文芸雑誌が増加したといふ平凡な事実から、その事実のみからものを言はぬ。

その「幽霊の正体」を、小林秀雄は、作家や批評家が「純文学の再生」や「文芸復興の喜び」を叫んでいるのだとする批評に求めている。すなわち、彼が「文芸復興」現象を「幽霊」と見立てて批判したのは、それを批評として語るという行為にほかならない。彼からみればそれは、「或る問題が現はれる、皆んなが寄つてたかつて解決しようとか、る。処が当の問題は、解決されようにも問題の形をまだ成してはをらぬといふ始末」なのである。もとより、「文芸復興」と称するに相応しい「問題」を成すことは、実際にその名に値する文学作品が出現するかあるいは新たな文学運動が起こつてから、ということにならう。だが、「平凡な事実」として記されている「二三の文芸雑誌」、そのなかでも話題を独占した

感のある同人雑誌『文学界』誕生の経緯には、この時点ですでに考察するにたる「問題の形」を形成していたように思われる。

本稿で試みるのは、川端康成、小林秀雄、武田麟太郎、林房雄らが結集して創刊した同人雑誌『文学界』の誕生に影ながら尽力した編集者田中直樹という人物に関する考察である。とりわけ注目したいのは、『文学界』を自社から発刊する以前の娯楽雑誌における田中直樹の編集方針と彼の文学及び文化観との相関についてである。以下に後述するように、文芸雑誌の出版元として文学作品を読者に供給する側となった田中直樹はまた、文学的営為に関して並々ならぬ情熱をもっていた人物でもあったのである。本稿では、田中直樹が、編集者として娯楽雑誌から純文芸雑誌へと架橋する経緯に注目し、彼の文学なるものに対する情熱との関連に則して検証するものである。

一、「エロ・グロ雑誌」の編集者、文化公論社主宰田中直樹

一九三〇年代に到来したいわゆる「文芸復興」現象その始発期を概観するに、同人雑誌『文学界』誕生に尽力した田中直樹という人物に注目したいのは、藤村透谷の『文学界』に比して日本近代文学の伝統を継承すべく当時名を馳せた同人たちが結集したその試みもさることながら、その文芸雑誌が『犯罪公論』の出版元である文化公論社から発刊された内実⁴に一九三三年の文学現象にほかならないという歴史性を問いたがためである。田中直樹（本名、田中直一）は、草創期の『文芸春秋』、武俠社の『犯罪科学』といった編集者としての経歴を経て、一九三一年十月から三省堂系列の四六書院で『犯罪公論』の編集を手掛け、一年後にはこの雑誌の発行権を譲渡され文化公論社を興している⁴。この田中直樹という編集者がきわめて興味深い人物であったことは、当時のゴシップ記事や『文学界』創刊時における回想記の類、あるいは文壇史でのエピソードなどから窺うことができよう。とりわけ、林房雄は、以下のように書いている。

混沌おのずから集って天地を別つたとすれば、文学復興の気運おのずから集って「文学界」を結成したのである。（この成立の事情を、個々人の同人について、編集者田中直樹のことをふくめて、くわしくかいたら、おもしろい読物になることと思うが、それはいはずれ、後の機会にゆずる。）⁵

とはいえ、同人雑誌として出発した『文学界』における田中直樹の役割といえ、雑誌経営の責任者としてであり、同人による編集会議を経て掲載が決定されたものを期日までに編集するという行程に限られていた。しかしここで、「文学復興の気運おのずから集って『文学界』を結成した」とまず書かれ、「田中直樹君」という名前が「編集者」として括弧付けで記されているという注目度の度合いから推察すれば、『文学界』創刊にまつわる「文学復興の気運」を体現する人物のひとりとして、林房雄が彼の名前を付加しているのはきわめて興味深いといえよう。何故ならば、田中直樹が、いわば正統の文学史においてではなく、「エロ・グロ・ナンセンス」の時代を風靡した『犯罪科学』やその後の『犯罪公論』といった娯楽雑誌の編集者として語られるべき人物だからである。

「エロ・グロ雑誌」の出版社から、当時名うての流行作家が結集し純文芸雑誌が発刊されるという成立事情。加えて、その目指すところは「文学の更生」、すなわち日本近代文学が歩んできた「文学の正道にたちかへる」という理想であったという事実⁶⁾。こうした『文学界』創刊に関する経緯が、時の文芸ジャーナリズムに賛否両論を巻き起こし、やがてこの純文芸雑誌は、「文芸復興」現象ともいべき文学状況をリードすることにもなるのである。その「文芸復興」現象に批判的であった杉山平助は、『文学界』の創刊が文化公論社の緻密な出版戦略に依拠したものであるのではないかと揶揄している⁷⁾。このような指摘の背景には、あらゆる夾雑性を排した純粹でかつ高尚であるべき文学的営為が、退廃的とも称された「エロ・グロ雑誌」の出版社と結びついて生まれたという事実に対する不信感もしくは嘲笑を読みとるべきであろう。そこていまひとつ、そうした当時の雰囲気を実に語った、夙に名高い高見順の回想を取りあげてみたい。

『犯罪公論』は単なる猟奇雑誌ではなく、田中直樹は単なる猟奇雑誌の発行者なのではなかった。だが、そうも言っても、『犯罪公論』は世間の眼からすれば、やっぱりエロ・グロの雑誌であり、『文学界』がそんな雑誌の庇護のもとに発刊されるということは、本来なら、清潔を重んずる文学読者に対して不潔な印象を与えないではおかなかつたはずである。ところが、当時は、そんな印象を受けなかった。やや意外という感じはあったが、不潔感とはちがうのだった。なぜだろうか⁸⁾。

田中直樹の『犯罪公論』を別段では「インチキ雑誌」「猟奇雑誌」とも呼んでいる高見順はそこで、「一種の社会的反

「逆精神」を「エログロ雑誌」の隠された内実として見出すことになる。それが、文化公論社から発刊された『文学界』に「不潔な印象」を感じなかつた理由なのである。こうした彼の回想から感得すべきなのは、文学的営為が「清潔」であることを重視するその態度であろう。けれども、『文学界』が文化公論社から発行された経緯を、『犯罪公論』の出版元という雑誌媒体の世評的性格からではなく、「エログロ雑誌」にはふさわしからぬ「社会的叛逆精神」に求めるといふのは、後述するように、雑誌出版者としての田中直樹の編集方針と比較してみても看過すべきではないだろう。その高見順は、『犯罪公論』に確固とした「社会的叛逆精神」があるのだとするその解釈を、それと同等の雑誌だとする『人物評論』に掲載されている『犯罪公論』の目次広告から推測しているのだが、一九三三年三月に発刊された大宅壮一編集の『人物評論』創刊号には、以下のような記事が掲載されている。

「犯罪公論」の田中直樹君、赤手空腕雑誌を掲げて独立するや、従来の執筆者挙つてこれを応援し、雑誌立ちどころに生まる。この編集者にしてこの執筆あり。チャーターリズム界近年の美談といふべし。(B⁹)

高見順が「同種同類のよしみ」と記している『犯罪公論』と『人物評論』の関係は、このように編集者田中直樹という人物像の評価となつて示されている。このほかに『人物評論』誌上に見受けられる田中直樹関連の記事はといえば、有名な絶食事件についてのゴシップが十月号に載り、そこでは「犯罪公論」を独力で経営してゐる雑誌界の快男児」という評となつて紹介されている。また、その他の『文学界』創刊に関する記事については、早くも六月号では「武田麟太郎氏の雑誌創刊」という項目がみられ、八月号にはその武田が林房雄と新雑誌を発刊するということを噂としてほめかしている¹⁰。こうした田中直樹という人物像措定から窺えるのは、娯楽雑誌の編集者として高い評価を獲得しているのに対して、それがいざ純文芸雑誌の編集者となると概ね批判の矛先を向けられるか、あるいはまわりくどい評価となるかのいずれかであつたということである。すなわち、娯楽雑誌から純文芸雑誌へという雑誌ジャンルの架橋という観点からすると、編集者としての田中直樹像は、その双方の評価ではきわめて対照的であるといえよう。

二、娯楽雑誌の編集方針

すでにみたとおり、「エロ・グロ雑誌」の編集者兼経営者としてみれば、文化公論社の田中直樹は、娯楽雑誌の編集者としてある程度の評価を得ていたといえる。高見順が「不潔な印象」を拭えないとした「エロ・グロ雑誌」という呼称は、一九三〇年前後に頂点に達した「エロ・グロ・ナンセンス」と総称される時代風俗からきていると考えてよい。この風潮は、アメリカカニズムの影響が殊に指摘されている一九二〇年代の映画・広告・歌謡に代表される大衆文化、すなわち、モダニズム現象として把握できる。大宅壮一は、その風俗としてのモダニズムを「時代の尖端」それも「末梢的尖端」とみて、「モダン・ライフには「理想」がない」「道徳」がない」「刺激はあるが、「感激」はない」と看破していた。こうしたモダニズム現象に関して、南博氏は「当時のモダン風俗は、ファシズムが欺瞞的に呼号した、精神主義、禁欲主義に對して、民衆の側で意識的あるいは無意識のうちにくらみ、風俗的な抵抗である」と述べている。もとよりファシズムという語には多少疑念があるものの、その對抗文化的な役割を担ったとされるモダニズム現象には、それが確固とした指標のない「末梢的尖端」であることこそが、支配権力の側もしくは既存の価値体系に對する大衆の「抵抗」的表現として解釈できるのである。

田中直樹が編集を担当した『犯罪科学』そして『犯罪公論』は、概してそうした大衆の欲望を満たす娯楽雑誌であったと把握できよう。けれども、武俠社の『犯罪科学』から四六書院そして文化公論社の『犯罪公論』に見受けられる彼の言説群には、既成の価値観に依拠しないことよって無言の「抵抗」を表明していたモダニズム現象を、あたかも換骨奪胎してしまふかのような特徴が窺えるのである。

先づ国を揚げて民草を救へ！犯罪者絶滅の運動を起せ！一人の失業者の存することも其国為政者当事者の恥である。一人の犯罪者のあることも其国為政者、教育者、宗教者、学者の恥辱であり引いては全国民の恥である。万人は先づ個人である前に公人。而して凡ては少数の人の為のみにあらず、全人類のために為されなければならぬ。

これは、一九三一年十月に発刊された『犯罪公論』創刊号の「巻頭言」である。この「巻頭言」が田中直樹によるもの

であることは、その名前が明記されている「編輯後記」や他の文章との内容や文体比較を鑑みれば明らかと思われる。引用は部分的なものにとどめたのだが、その前段では『東京日々新聞』の三面記事を取りあげた「失業者の家庭の悲惨」の現状について語られており、そうした毎月の時事問題に対してその都度異議を申し立てるとというのが「巻頭言」のひとつの特徴である。とりあえず、『犯罪公論』のこうした側面が、高見順が当時の「エロ・グロ雑誌」に看取した「社会的反逆精神」に繋がるといえよう。だがしかし、「全国民」「万人」「全人類」と記される大迎すぎる語句や「万人は先づ個人である前に公人」とする道徳的な主張、あるいは「先づ国を揚げて民草を救へ！ 犯罪者絶滅の運動を起せ！」とする過激なスローガンなどから窺えば、このような田中直樹のきわめて紋切型な言辭は、どのように説明すべきなのであろうか。

そのひとつの解釈としては、このような文章はあくまで建前にはかならず、『犯罪公論』は「エロ・グロ雑誌」という性格が最上段に出ていることと変わりはないとみることが可能であろうし、それは否定できない事実としてある。だが、田中直樹の言説群には、「巻頭言」のみならず、こうした特徴を一貫して見受けられることができ、たんなる宣伝文句では済ませられない要素があるように思われる。これについては、やがて同人雑誌『文学界』の自社からの発刊を快諾した理由とも関わる問題であるので、ここで彼の編集方針について考察してみたい。

田中直樹は、『娯楽雑誌』とは「學術雑誌を除いた一切の雑誌である」という考えの持ち主である。これはつまり、「娯楽雑誌」と「學術雑誌」とを明確に分け隔てるだけでなく、『中央公論』や『改造』といった「高級雑誌」を一般的な意味での「娯楽雑誌」と区別するという線引きを否認する態度である。それは、いわゆる「高級雑誌」が「娯楽」的要素を多分に備えているからだとされるものの、何をもって「娯楽」とするのかは定かではない。しかしながら注目したいのは、こうした見方に読者側の視点が採り入れられていることである。「學術的」なものを読むためにのみ、読者はそれ等（『中央公論』や『改造』）の雑誌を購つてゐないからである¹⁶。けれども、読者嗜好に準じるという態度だけでは、『犯罪公論』のような雑誌が「社会的反逆精神」をもって称されることにはならない。田中直樹の編集方針を支えていたのは、読者という範疇を括弧に入れた、たとえば以下のような言葉である。

然らば、如何なる雑誌を如何にして編集すればよいか、僕はそれを最も端的に表現してゐる言葉として、亜米利加の新聞王ハーストが部下に与へたと云ふ言葉を借用しよう。

「大衆と共に興奮せよ」

「大衆の感情を表現せよ」

「如何なる代償を払ふとも群衆を捉へよ」

「間断なく喧噪をつゞけて読者を惹きつけよ」⁽¹⁷⁾

見落としてならないのは、『犯罪公論』の「社会的反逆精神」が、このような編集方針と密接に絡み合ったものだといふことである。W・R・ハーストの言葉として記されている「大衆」「群衆」そして「読者」が、この場合、不可分な関係にあることは了承できるであろう。こういった言説群を編集方針の至言とする理由に関して、彼は「僕はハーストの新聞によつて悪人が出たと云ふことをまだ耳にしない。ハーストの新聞によつて、文盲の人々が新聞紙を読むことを覚えたにしても——。なほ僕に言はしむれば「日の下に何の聖きことあらんや」と述べている。「文盲の人々」が新聞雑誌を読むことによつて識字力を向上するという経緯に、各々の媒体のもつ娯樂的要素が多分に関わつていたことは否定できない事実であるし、「日の下に何の聖きことあらんや」とする彼のジャーナリスティックな態度にも一理はあるだろう。だが、こうした言葉から読みとれるのは、実際の読者層は若干異なるであろうが、田中直樹が、『犯罪公論』の読者層を広く大衆として措定していたということである。すなわち、彼は、猟奇事件や性風俗といった読者大衆の欲望を満たす内容を掲載することで、ある種の教化的な効果を期待していたといえる。しかし、「大衆と共に興奮せよ」といった言葉によつて明らかなのは、このような田中直樹流「娯樂雑誌」の編集方針が、読者大衆に対する煽動的な言説へとすぐさま転化する論理の性急さにはかならない。

三、読者大衆の啓蒙

文化公論社を主宰した田中直樹の言説群は、その大半が彼の編集した雑誌の「巻頭言」や「編輯後記」として残っている。もとよりそれを「エロ・グロ雑誌」の出版戦略と把握し、過大広告や宣伝文の類として処理してしまうのは容易いであろう。だが、これまでみてきたように、彼の言説群には、一九三〇年代前半における雑誌ジャーナリズムのありようと

いう見地からしても、注目するにたるべき問題があるのではないだろうか。それはすでに述べたように、雑誌メディアによる読者大衆への啓蒙的要素に関する問題である。田中直樹の言説群に見受けられるのは、いわゆる権力の側からの抑圧ではなく、そうした抑圧に対する反抗から成り立っているという特徴である。そこでまず、一九三二年八月号の『犯罪公論』「巻頭言」をみてみたい。

吾人は「犯罪公論」各号誌上に於て再三再四犯罪は性とパンを——殊にパンの問題を基調として発生するものであることを力説した。そして更に此処で亦又それを強調するものである。一片のパンで貞操を売つたてう伯林乃至維納の窮民話柄は、今や外国の話でなく、都会に、農村に、充滿してゐる。「旦那飯一杯でよござんすから」と言つた良民の妻の呻吟に似た声も筆者の暗黒街探求に際して直面せる事実、エロでない！ 獵奇でない！ この事象をどうする！ この良民の血のしたたる悲鳴をどうする！ 枕高高に眠ることの出来る為政者諸卿よ、宗教者諸卿よ、教育者諸卿よ、現実は先づ一片のパン、パンの食へるやうにしろ！ 米をつくるものに米の食へるやうにしろ！ ハギだらけの政治沢山、その場しのぎの政策沢山、根底からの建直し要求、然して犯罪者絶無の世界への行進を！¹⁹⁾

『犯罪公論』の隠された内面とは、その雑誌名にも示唆されているように、獵奇事件や売春等といった犯罪および風俗を広く公に語り伝えることで、その文化的背景にある経済的貧困あるいは社会的不安の問題を読者に訴えることを意味しているといえよう。それが、「犯罪は、性とパン」の「問題を基調として発生する」という「巻頭言」の主張に表れているのである。だが、問題となるのは、こうした「エロ・グロ雑誌」の隠された内面、すなわち「社会的反逆精神」が、どのように発現されているのかという論理的なプロセスである。

こうした『犯罪公論』の「巻頭言」で顕著に見受けられるのは、第一に、犯罪あるいはその温床である文化風俗を赤裸々に暴露することによって、逆に「犯罪者絶無の世界」を訴えるという方法にあり、第二に、それが読者ではなく「為政者」「宗教者」「教育者」という上位レベルへのいわば底上げ型の批判として立ちあげられている点にある。このような特徴から窺えるのは、引用文中にある「暗黒街探求」という言葉からも看取できるように、一方では、物語の欲望にも似た読者嗜好を充足させることを正当化させ、他方では、前述したとおり、大衆の「抵抗」的表現として解釈できるモダニズ

ム現象をあたかも換骨奪胎するかのような道德的な言説群を書き記しているということである。このように読者に語りかける田中直樹の言説群を支えていた思想的背景あるいは信念ともいべきものは、同年十一月号の「編輯後記」に記された、以下の文章によって窺えるであろう。

▽私の言ふ「私」と言ふ「言葉」の背後には「我々」があり、「我々」の背後には「大衆」がある。私は、その大衆の最も待望されるものを創り出したいと切に希つてゐる。その意味で、是非苦言を頂戴したい。⁽²⁰⁾

田中直樹の言説群を特徴づけていた「社会的反逆精神」をその背後で支えていたものは、この引用によって見事に言い表されているといえよう。それは、田中直樹の「私」という主体こそが、「我々」ひいては「大衆」を代弁しているのだとする論理的清算方法なのである。「犯罪は、性とパン」の「問題を基調として発生する」という彼の主張は、一九二九年の大恐慌に端を発する長期的な経済不況からくる社会的不安を背景として成り立っていることはいまでもない。もちろん、このような社会的不安が大衆のルサンチマンとなり、同時期に頂点に達した「エロ・グロ・ナンセンス」という時代風潮、加えてその風俗を活写した「エロ・グロ雑誌」の流行の一因となったことは疑いえないであろう。だがしかし、大衆という量的概念は、その定義上、みずからの主義主張を語ることでできない人々を指し示す概念である。田中直樹は、「大衆の最も待望されるものを創り出したい」と記してはいるものの、それは、「大衆」ならざるものによって表象¹¹代¹²行されないかぎり、「大衆」の声として反映されえないのである。すなわち、引用において明らかなのは、「私」の声を「大衆」のそれとして語る田中直樹のある種暴力的ともいえる自負なのである。

四、調停する文学、田中直樹の「文芸復興」

これまでみてきたのは、やがて同人雑誌『文学界』を創刊するにいたるまでの田中直樹の思想的背景とその言説群の特徴である。高見順が当時の「エロ・グロ雑誌」に看取した「社会的反逆精神」は、田中直樹独自の言説群となつて『犯罪公論』に反映されていたといえよう。それは、いかなる価値観にも依拠しないことによつて禁欲主義的な支配文化に対す

る抵抗的行為として存立しえたモグニズム現象の文化風俗的表現を、大衆をみずからこそが代弁できるという自負から、いわば底上げ型の異議申し立てに仮構するという田中直樹のレトリックに示唆されていたのである。それでは、そんな彼がなぜ同人雑誌『文学界』の自社からの発刊に、積極的な力を注いだのであろうか。

後年、田中直樹は、「『文学界』の創刊は、文芸復興を行うことが眼目である。利益を得るためであつたら、最初からその帰趨はわかかつて居り、協力はしない」と書いている。それは、「日本の現実にあきたらず、いわば真理を求める気持から」だと述べている青年時代の理想に通じているといつてよい。²¹⁾ 管見の限りでいえば、田中直樹の単行本は『犯罪科学』時代から書きためられ「著書埋草集」と銘打たれた『モダン、千夜一夜』しか確認できなかったのだが、自筆年譜には「同人雑誌に発表せる戴曲三篇創作短篇十篇ばかり」とあり、おそらくは上京して後のあたりから文芸創作を試みていたことが推察できる。そこにはまた、「生涯中にただ二冊だけ金で売らぬ長篇を書くつもり」とあるところから、いわゆる文学に寄せる関心もちあわせていたことが窺えよう。²²⁾ これらを踏まえながら、『文学界』を創刊した直後の『犯罪公論』、『編輯後記』をみてみたい。田中直樹は、「くだらない人達の間にとかくの噂があるやうだが、『文学界』は決して「出版屋の都合」でやつたのでは決してない」と断じ、次のように記している。

私は今度「文学界」の話があつたときに、すぐ同人雑誌を出したその当時と同じ情熱を感じた。少くとも私のしている仕事だと思つた。しなければならぬ仕事だ、と思つた。つぎつぎとだらしなくなつて行く人々を見ても、私は一面には、文学に割かれる頁が少くなつて行つたことにもその責があるやうに感じてゐた。中には文学専門で売り出した雑誌までが、とんでもない中間雑誌になつたり、総合雑誌になつたりして、しかも文学に割く頁は極く名のみになつて来てゐることに不甲斐ないと思ひ腹がたつてゐた。私は、私が私の社から「文学界」を出したことに對して、さうしたくぢらない人たちの噂を気にしないばかりか、誇らかな気持さえ感じてゐる。²³⁾

つまり、同人雑誌『文学界』を文化公論社から創刊するにいたつた要因は、文学に對する「情熱」である、田中直樹は述べているのである。「出版屋の都合」とは、前述したように、「エロ・グロ雑誌」の出版社が、新たに商品化されうる営利的な差異として「純文学」の領域に矛先を向けたのだとする見方であらう。それに対して、むしろ「誇らかな気持

さへ感じてゐる」と述べる箇所からしても、あるいは、当時の文芸雑誌の趨勢に悲憤慷慨するその態度からしても、田中直樹の文学に寄せる「情熱」が並たならぬものであつたといふことは推察できよう。尚、「文学専門で売り出した雑誌」とは、暗に菊池寛の『文芸春秋』を示唆しており、「その責」とあるのは文芸春秋社を志なからばで去ることになつた経緯に由来すると思われる。

だが、きわめて奇妙なのは、『文学界』にかかわることになつて以後のこうした田中直樹の言説群の変容なのである。「娛樂雑誌」とは「學術雑誌を除いた一切の雑誌である」とした確固たる編集方針の持ち主からすれば、文芸雑誌が、商業主義に則るあまり「中間雑誌」そして「総合雑誌」へと様変わりしてゆくことは、むしろ肯定してしかるべき事柄に属するからである。もちろん、彼が文芸雑誌を「學術雑誌」と同等に考へていたのではないかといふ観点も多分に認められるだろうが、『犯罪公論』には、この十二月号に載せられている小南又一郎「飲酒と犯罪」といった犯罪や性風俗に関する學術的な論考も数多く掲載されているのである。

このような田中直樹の文学に対する「情熱」もしくは偏向をもつとも典型的に肯う理由として注目したいのが、『文学界』を創刊してわずか三ヶ月後に為された、『犯罪公論』を『文化公論』と改める看板雑誌の誌名変更である。

▽独立一週年にして私は二つの仕事をやるやうになつた。その一つは我が「文化公論」今一つは「文学界」——「文学界」が投じた影響の如何に大きかつたかは既に知られてゐる、新年はいよいよその刈入れの年だ。一層い、新人と、素晴らしい作品の発掘に努めようと思ふ。更に「文化公論」であるが、「犯罪公論」をかく「文化公論」と更めた所以は、今更此処に詳説するまでもなく在来の、「犯罪」と云ふ分野に向けてゐた我々の視野を、広く「全文化」の上に転じたに外ならない。従つて、これからの我々の仕事は更に研究の範囲を拡大して、凡ゆる文化史上に意義ある役割を果すことになるのである。²⁴

もとより、『文化公論』という雑誌名は、文化公論社の社名に由来することはいうまでもない。『犯罪公論』には、四六書院から一九三二年九月に当時編集長であつた田中直樹がその雑誌名を引き継いだといふ経緯があることはすでに述べたとおりである。つまり、『文化公論』への誌名変更したいは、文化公論社を設立したその当初から構想されていたとも

いえるのである。それゆえ問題となるのは、何故この時期に雑誌名を改めたのかということである。雑誌名の変更が計画されたものであるならば、『文学界』の創刊に合わせた一九三三年の九月あるいは十月、もしくは、文化公論社の『犯罪公論』となつて一年後の十一月が妥当であるだろう。だが、『犯罪公論』十一月号は「独立一周年記念号」と銘打たれてゐるのみである。推察するに、『犯罪公論』から『文化公論』への誌名変更は、同人雑誌『文学界』を創刊して以降の周囲の反響に負うところが大きいといえる。加えてこうした周囲の状況は、娯楽雑誌の編集者として歩んできた田中直樹のこれまでのプロセスと、同人雑誌『文学界』発刊によって再燃した彼の文学への「情熱」を肯う以外のものではなかつたのであろう。

こうして文化公論社は、純文芸雑誌『文学界』と娯楽雑誌『文化公論』という二つの看板雑誌を発行する出版社となる。田中直樹によれば、『犯罪公論』から『文化公論』への誌名変更は、「犯罪」と云ふ分野に向けてゐた我々の視野を、広く「全文化」の上に転じた」からであると説明されていたのだが、その結果、『文化公論』となつて充実するのはおもに新人作家の創作欄なのである。「文化公論」最初の試みとして「文芸作品」三篇を掲載した。何れも新人ばかり、上田廣氏の「電化」峰進太郎氏の「指」谷崎麟太郎氏の「橋」大方の批評を俟つ²⁵。周知のように、『文学界』の出版元はこの後、文化公論社から野々上慶一の文圃堂に移ることになる。だが、これまでみてきたように、その始発期から「文芸復興」現象を主導したともいえる『文学界』は、その最も近傍にいた、娯楽雑誌の編集者として名を馳せていた田中直樹の文化観に多大な影響を与えたのである。文化公論社主宰田中直樹の娯楽雑誌の領分から文芸雑誌への架橋、換言すれば、『文学界』創刊以前の娯楽雑誌の編集者としての道程と彼の追い求める「真理」とを調停したのは、まさしく文学に対する情熱とその営為であつたといえよう。

注

(1) これに関しては、拙稿「一九三三年における「文芸復興」のスローガンについて」(『文学研究論集』第十五号、筑波大学比較・理論文学会、一九九八年三月)を参照されたい。

(2) 小林秀雄「文学界の混乱——文芸時評——」『文芸春秋』新年号、文芸春秋社、一九三四年一月、三二〇頁。

- (3) 前掲(注2)同上、二二〇頁。
- (4) 田中直樹の履歴に関しては、『綜合チャーターナリズム講座』第十二卷(内外社、一九三二年)に自筆年譜、その他に、田中直樹「『文学界』創刊の想い出」(『解説』『文学界』復刻版別冊)、日本近代文学館、一九七五年)、郡司勝義「田中直樹氏寄贈『文学界』創刊関係資料」(『神奈川近代文学館』第五〇号、一九九五年)等が参考となる。
- (5) 林房雄「『文学界』について」、『林房雄著作集田獄中記他』、翼書院、一九六九年、一七四頁。初出は、『文学界』一九三四年一月号。
- (6) 田中直樹「『文学界』創刊の想い出」、『解説』『文学界』復刻版別冊、日本近代文学館、一九七五年。
- (7) 「文芸復興座談会」、『文芸春秋』十一月号、文芸春秋社、一九三三年十一月、二〇一頁。
- (8) 高見順『昭和文学盛衰史』、講談社、一九六五年、二〇七頁。
- (9) 「『生殺陣——文化時評——』」、『人物評論』創刊号、人物評論社、一九三三年三月、一三三頁。
- (10) 順に、「原稿催促に短銃携帯 執筆がおくると命の危い」、『文学界』同人(十月号、一六三頁)、「武田麟太郎氏の雑誌創刊」(六月号、一六二頁)、「父と父」(八月号、一七〇頁)、以上『人物評論』、『人物評論社』。
- (11) 大宅壮一「モダン相とモダン層」、『大宅壮一全集』第二卷、蒼洋社、一九八一年、七頁。
- (12) 南博「日本モダンリズムについて」、『現代のエスプリ』第一八八号、至文堂、一九八三年三月、六頁。
- (13) 「巻頭言」『犯罪公論』創刊号、四六書院、一九三二年十月。
- (14) 『犯罪公論』は、実話小説、暴露記事、研究論文など犯罪や売春等といった文化風俗に関する多彩な内容を誇る娯楽雑誌であった。そのなかには、「グラフ新女性線画報」(一九三二年二月号)や、「全肉体美ミス・ニッポン懸賞募集」(一九三二年春に募集、随時掲載)といった特集や、「特集支那抗日ポスター写真集(犯罪公論特写)」(一九三三年五月号)、「グラフその頃の思ひ出画報」(一九三三年十二月号)といった特局に照らした戦意高揚を目指しているともいえる戦争特集もあった。
- (15) 田中直樹「娯楽雑誌」の編集・其他——主観的な余りに主観的な——』、『綜合チャーターナリズム講座』第十二卷、内外社、一九三一年、二六九頁。
- (16) 前掲注(15)同上、二六九頁。
- (17) 前掲注(15)同上、二七〇―二七一頁。
- (18) 前掲注(15)同上、二七一頁。
- (19) 「巻頭言」『犯罪公論』八月号、四六書院、一九三二年。
- (20) 「編輯後記」『犯罪公論』十一月号、文化公論社、一九三二年十一月。
- (21) 田中直樹「『文学界』創刊の想い出」、『解説』『文学界』復刻版別冊、日本近代文学館、一九七五年、引用は二六頁と一五頁。

(22) 前掲の『綜合ヂャーナリズム講座』第十二巻の「自筆年譜」には、「生涯中にただ二冊だけ金で売らぬ長篇を書くつもり、一冊は病氣と闘ひ酷使と闘ひながら生きて来た自分の手記を中心とした小説、一冊は故なくしてブルジョワジイの毒手に傷けられ生殺しの目に会はされながら生きて来現在も生きつつある姉と姉の三人の子達に対する教育家、宗教家、法律家、政治家、等々等の悪徳とギマンに充ち満ちた生活ぶりを暴露した小説を」と結ばれている。

(23) 田中直樹「編輯後記」『犯罪公論』十二月号、文化公論社、一九三三年十二月。

(24) 田中直樹「編輯後記」『文化公論』一月号、文化公論社、一九三四年一月。

(25) 田中直樹「編輯後記」『文化公論』一月号、文化公論社、一九三四年一月。この「編輯後記」での「文芸作品」の紹介欄は、従来の「研究物」や「実話・読物・小説」欄と明確に区別して記されている。尚、『文化公論』四月号（一九三四年）には、田中直樹じしんが一九二七年に書いたと記されている創作「枯柴」が掲載されていることにも留意したい。